

大学生短期研修における学習者の文化認識

Learners' perceptions of culture in a short-term Japanese language program for university students

野畑理佳・市岡香代

NOHATA Rika・ICHIOKA Kayo

国際交流基金関西国際センター

The Japan Foundation Japanese-Language Institute, Kansai

〒598-0093 大阪府泉南郡田尻町りんくうポート北 3-14

E-mail: Rika_Nohata@jpf.go.jp, Kayo_Ichioka@jpf.go.jp

Abstract: We conducted an interview survey in order to study how learners in a 6 week program for university students would perceive cultures. The result shows their perceptions involve not only the formation and modification of images of Japan but also the reinterpretation of their own culture and the awareness of themselves. Through the awareness of themselves the learners perceive their cultural experiences as important cross-cultural experiences. We have found that it is important for this kind of program to present learners with the perspectives for understanding cultures and the opportunities for them to share their awareness with others with different cultural backgrounds.

キーワード：文化認識、自文化、自己への気づき、異文化体験、異文化間能力

1. はじめに

国際交流基金関西国際センターで実施している大学生日本語学習者訪日研修（以下、大学生短期研修）は、体験・交流を中心とした6週間のプログラムであり、研修目標の一つに日本の文化社会について理解を深めることがあげられている。当研修では自律学習支援の枠組みにおいて個々の学習者の日本語および文化社会についての気づきの記録を促し、それをクラスで共有する機会も設けている。このような経験を通じて学習者はどのように文化を捉えたのか。本発表では、短期間の滞在において学習者がどのように文化を認識したかを探るため、インタビューを実施した結果を報告する。

2. 大学生短期研修の枠組み

当研修は、(1)「日本理解」「スピーチ」「インタビュー」等の日本語授業、(2)交流会やホームビジットといった体験プログラム、(3)自己目標の設定と自己評価、気づきの記録、過去の学習を振り返る、気づきを共有するなどの自律学習のための活動の3つから構成される。

学習者は授業において、日本についての様々な話題でディスカッションをしたり日本人に

インタビューを実施しグループで結果をまとめる過程において、文化を捉える観点を知り自文化や他者の文化について考える機会を持つ。さらに気づきをクラスで共有することで、他者と比較しながら自身の文化認識について考え深める機会を持つ。

3. 調査方法

本調査では、2011年10月および12月に実施された2つの研修から、日本語能力が比較的高い学習者(N2~N1レベル相当)計12名に、日本文化への気づき、自文化について考える機会、他者と気づきを共有した機会について問う半構造化インタビューを実施した。

4. 結果

4-1. 日本文化に対する認識

学習者は研修活動やその他個別の体験をきっかけに、日本文化に対して認識を深めていた。新しくイメージが形成される場合もあるが、多くは既存イメージの確認や、イメージの具体化、イメージの修正であった。

また、インタビューからは学習者の日本文化に対する態度も見られた。単に好悪の評価をするだけでなく、評価を保留したり新たな疑問を

持つなどさらに認識を深めようとするケース見られた。

【イメージの具体化】
・来日前は日本の教育システムは自国と同じだが、何か違いがあると思っていた。日本で大学生と話したら、高校生はほとんどアルバイトしているし、大学生も一人暮らしながら大学での活動やイベントを楽しんでいることがわかった。自国では、高校生は勉強だけだし、大学生も個人の生活を楽しんでいるだけだ。(A)

【イメージの修正】
・日本には戸籍もあるし、シングルマザーや若い年で妊娠して結婚せずに暮らしている人に対して差別があると思ったが、インタビューした人たちは皆「結婚する必要がない」、「シングルマザーに対して差別がない」と答えた。(B)

【態度表明】
(日本の店員の接客態度が丁寧だということについて)
・店員が丁寧な言葉を使うと気持ちがいい。(C)
・本当に丁寧な性格なのか習ったルールなのかかわからない。これは普段の人間関係でも問題になっていると思うが、この見方が正しいかどうかはわからない。(D)

4-2. 自文化に対する認識

学習者は日本文化について認識を深める過程で自文化との比較を行い自文化に対しても認識を深めていた。特に相対的な視点から自文化への新たな解釈がなされている。

・日本は資源が貧しい国だが、インフラが整っているのはすばらしい。環境への意識も高い。自国は資源は豊かだが、環境に対する意識は低い。資源が豊富で国土も広いが経済は発展していない。生まれた国なのですばらしいと言う意識はあるが少し違ってほしいと思った。(C)

4-3. 自己への気づき

さらに学習者の中には、自己と他者、或いは現在と過去という相対的な視点で自分自身に対する認識を深める者もあり、学習者の自己形成において異文化経験が影響力を持つことがわかった。

・今の国に8年住んでいても今でも外国という感じがするが、日本に来たら生まれた国と似ていることが多くて、日本なら「住める」と思った。(E)

・来る前から自分はルールや伝統に縛られていると感じていたが、来日後強くその縛りを感じるようになった。日本人と比べたら、自分の今の生活は本当に自分がしたい生活なのかと反省している。(A)

・今までは何で自分が日本語を勉強しているのか明確ではなかったが、ここに来て本当に日本語が好きなんだという意識が出てきた。(F)

5. 文化認識の変化

このように短期の研修では、何かきっかけがあると新たな文化認識を持つというような単発

的なケースが多い。しかし、学習者の中で一つの文化認識が深化したり、複数の文化認識が有機的に結びついたりした例もあった。これは日本文化に対してだけではなく、自己への気づきに関しても見られた現象である。

来日前:日本の奥さんのような専業主婦への強い憧れ
来日後:

1.日本では女性の社会進出が進んでいる。日本の主婦のイメージが変わった。	← 授業やメディアの情報
2.自分の理想的な主婦はどこに存在しているのか。	← 他の学習者との意見交換
3.ホストマザーのように、仕事と家庭を両立できる人になりたい。それならば、日本でなくてもできるのではないか。(E)	← ホームビジット

6. まとめ

学習者の文化認識には、日本文化に対するイメージの具体化や修正だけでなく、相対的な視点を持つことによる自文化についての新たな解釈も含まれる。このような文化認識は、他の文化背景を持つ学習者との意見交換や気づきの共有によって修正や確認の機会を得ると同時に、視野の広がりを見せる。さらに自己への気づきは、自己形成・自己の拡充にも資する認識であり、自身の体験を重要な異文化経験として個人のなかに位置づけることで、その価値を意識することにつながると言えよう。このような気づきの深化は、異文化経験の省察意識を高め、異文化間能力を深める可能性を持つと言えるのではないだろうか。

本研修は6週間という短期ではあるが、①教室内外での具体的な体験の提供、②文化を捉えるための観点の提示、③他の文化背景を持つ他者との意見交換の機会および気づきを共有する機会の提供によって、文化認識が重要な異文化経験としての価値を持つきっかけを作り出している。

参考文献

細川英雄(2002)『日本語教育は何をめざすか一言語文化活動の理論と実践』明石書店
クラムシュ、クレア(2007)「異文化間リテラシーとコミュニケーション能力」『変貌する言語教育』くろしお出版 pp.2-26